



カルメン紀行

スペインの幻想とロマン

永峯清成



メン紀行

スペインの幻想とロマン

永峯清成

彩流社

著者略歴

永峯清成（ながみね・きよなり）

1932年、名古屋市生まれ

主な作品

『楠木一族』『北畠親房』『怨みの皇子たち』『夢法師』『新田義貞』

『楠木一族残党記』（以上、新人物往来社刊）

『カルメン発見』（荒地出版社刊）

日本ペンクラブ会員

カルメン紀行——スペインの幻想とロマン

1996年12月25日 発行

定価は、カバーに
表示してあります

著 者 永 峯 清 成

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102 東京都千代田区富士見 2-2-2

電話03(3234)5931

組版 (有) ポイントナイン

印刷 (株) 平 河 工 業 社

製本 (有) 青 木 製 本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-426-8

プロローグ

カルメン——。その名を初めて耳にしたのはいつの頃だったか。以来スペインは、私にとっては憧れの地だった。憧れという語感はやさげだが、灼熱の太陽の下で行われる闘牛とそこに響き渡るパソドブルの音楽を想うこともあれば、また時によりそれは、タレルガの「アルハンブラの想い出」を聴くような物憂いさでもあった。

初めてスペインを訪れた時、マドリードのホテルの窓から明けの明星を見て感動した。空は東から赤く、それが中天から西に拡がるにしたがって青から墨色にと色を変えていた。明けの明星はその東寄りに、目を刺すほどの金色に輝いていたのだ。その時の空全体の空気の乾きに、私は初めてスペインへ来たことを実感した。

それから私は、四度スペインに旅した。あとの三回は、カルメンを尋ねての旅だった。カルメンの本当の姿が見たかったからだ。不遜にも私は、『カルメン』の作者であるメリメに対して疑問をもつようになっていたからだ。彼は本当に、カルメンを描くことができたのだろうか。それゆえ私は、自分自身の目でカルメンの姿を確かめねばならなかった。

カルメンは自由奔放な愛で男を弄んだと、人は言う。しかしそれだけなら、パリの女、マノンと同じではないか。そうではない。何よりも彼女はヒターナだったのだ。ヒターナとは何か。私は先

ず、ヒターナとしてのカルメンの姿も見届けなければならなかった。

カルメンの相手役となるドン・ホセは、カルメンが生きていた場所とは余りにも懸け離れた地、バスクのナバラで生まれた。言われるように、彼は本当にナバラのホセ卿だったのか。その出自については不明な点が多い。だがたとえ二人が遠く離れた地で生まれたとしても、互いの関係は、結局は宿命的なものによって結ばれていたのだ。私は彼が生まれ育ったエリソンドをも、もう一度この目で見届けよう。

作者のメリメの姿は、時として煩わしいものがある。しかし彼は、なんといってもカルメンとホセに実際に会っているのだ。場合によっては、『カルメン紀行』の中の証人として、その都度登場してもらふことになるだろう。カルメンとドン・ホセを追っての旅は、今度もまたマドリードから始まることになる。

カルメン紀行／目次

プロローグ

エチャラールのカルメン 9

カルメンの生まれ故郷 9

バスケットとは何か 12

エチャラール村へ 17

生きているカルメン伝説 26

カルメンは幌馬車の中で生まれた 33

ドン・ホセ伝説 37

ドン・ホセの生まれ故郷 37

ナバラの男 48

ホセ・リッサラベンゴアの名 54

魔法使いの娘 66

カルメンのモデルは誰か 66

メリメの足跡 70

サグントの町 74

絞首刑の話 87

プソーのカルメン 95

カルチェナ平野の出逢い 100

小説『カルメン』の書き出し 100

カルメンとメリメが出逢った場所 110

ゴヤの描いたスペイン 122

コルドバの風景 126

タバコ工場のヒターナ 132

ドン・ホセの回想 132

ホセはカルメンの虜になる 138

一兵卒になったホセ 148

カルメンの誘惑 156

ヒターノの誇り 159

ヒターノの歴史 159

アンドンシアのヒターノ 166

ヒターノの生活 168

セビージャの風景 175

トゥリアナのヒターノたち 175

文学にみるセビージャの町 180

サンタ・クルス街 187

マエストウランサ闘牛場 192

ペテネーラ 199

ペテネーラは殺された 199

二人目のペテネーラ 204

ヒターノが怖れる「ペテネーラ」

ロンダへの道 221

ホセは密輸業者となって 221

密輸基地ガウシン 228

山賊ホセ・マリア 233

ジブラルタルのカルメン 239

ロンダの町 244

アルバイシンの想い出 248

死を告げる予言 248

グラナダの隠れ家 251

グラナダを徘徊して 259

ゲアジスの洞窟住宅 270

アルバイシンの丘 275

コルドバの朝焼け 280

コルドバへの道 280

コルドバの闘牛場 286

ヒターノの掟——カルメンの死 289

エピソード 297

あとがき 301

参考にした本 303

エチャラールのカルメン

カルメンの生まれ故郷

バスク地方、ナバラの山中にエチャラールという名の小さな村がある。ビダソア川がビスケー湾に向かって流れる川沿いの道から別れて東へ四、五キロ。そのまま道を行けば、フランスとの国境に至る。

そこは周りを緑の山々に囲まれ、小川にかかる橋を村の入口として、四、五十戸の民家が教会を中心として寄り添うようにして建っている。村全体はスペインからはどこか忘れられたような、ひっそりとした表情を見せていた。外界からは閉ざされて、時の流れからも置き去りにされたような村のたたずまいだった。

三年前の春、私は初めてそこを訪れ、そして今またその風景を目の当たりにしていたのだ。それは自分の人生の中の或る時を想うような、なんとも言えない懐かしさだった。

カルメンは本当にエチャラール村で生まれたのだろうか。それはありえないと言ってよい。セビージャのタバコ工場で、同僚を刃物で刺し殺した彼女は、アンダルシア生まれのあばずれ女で、しかもジプシー、つまりヒターナだったのだ。エチャラール村はスペインの北の端、ピレネー山脈

の向こう側の山裾にある。アンダルシアとナバラは、スペインの中では、互いに最も遠い位置にあったのだ。

しかしカルメンは、ドン・ホセに向かってわたしはエチャラルの生まれで、子供の時にジプシーにさらわれてセビージャに連れてこられたのだと言った。ホセはそれは嘘だと言う。ホセこそナバラの生まれで、彼はカルメンが使うおかしなバスク語に、彼女の言うことを信じない。

カルメンはなおも言う。エチャラル村には今でも母が住んでおり、庭には林檎酒にするための林檎の木が二十本ほど植えてある。またそこからは、雪に包まれた真つ白な山を見ることができると。その言葉が、ホセの気持ちを次第に動かしていった。そして彼は、監獄へ連れて行く筈のカルメンを、セビージャの雑踏の中に逃がしてしまうのである。

三年前、私はマドリードから、Ｔさんと一緒にナバラにやって来た。その時パンプローナからはタクシーを頼んだ。アンヘルという名の運転手である。私たちは、ドン・ホセが生まれたとされるエリソンドの町を尋ねたあとに、このエチャラル村を訪れたのだ。

小川にかかる橋を渡り、私たちは教会の前に車を止めた。附近で大人たちの姿を二、三人見かけたが、彼らはなぜか、私たちの視線を拒むようにして戸の陰に隠れた。また四、五人の小学生が、大人たちよりはずっと近く私たちの周りにいたにもかかわらず、彼らの態度は全くそれを無視するものだった。

アンダルシアの人々に見られるような人懐かしさはないにしても、私たちは、明らかにどこか警戒されているような堅苦しさを感じないではいられなかった。それにアンヘルが、子供たちが使うバスク語の意味が、はつきり聞きとれないと言った。彼の住んでいるパンプローナは、ナバラの州



空から見たエチャラル村。

都である。そこでさえも、今ではバスク語を使わなくなっていたのだ。セビージャの騒々しさの中に徘徊しているカルメンとバスク語。余りにも懸け離れた感じがする。

結局私たちは、その時村の人たちとは一言も交すことなくエチャラル村をあとにした。しかし私は、それでもなお、カルメンがこの村の生まれであると確かめられたいくつかの風景も見たのだ。教会の裏手には小さな広場があり、そこには石造りの十字架が建っていた。幼い頃のカルメンが、甲高い声を上げながら飛び回っていた場所なのだろう。

また村の建物の向こう側には、カルメンが言ったように、冬になると雪を被るであろう形よい山を間近に見ることもできた。そして村の入口を流れる小川には、旅の途中に、ヒターノたちが幌馬車を置くには、ほどよい広さの川原があった。カルメンが言うように、彼女はそこでヒターノにさらわれたのかもしれない。

教会の墓地には、一八〇七、一八〇八と記した墓石が、半分土の中に埋もれるようにしてあった。彼女の父か母のもので、おそらく彼らはその年に亡くなったのだらう。カルメンは幼かった時に、すでに父か母を亡くしたのかもしれない。だからさらわれたというより、彼女は村びとたちの手により、ちょうどその時川原に野営していたヒターノの一団に預けられたのだらう。売られたという言葉を使うのは、余りにも惨めである。

私はそういうカルメンの幼児の頃の姿をとりとめもなく想いながらも、一方ではやはり、彼女がエチャラールで生まれたというのは、ありえないことだと思った。ホセの手によって、監獄へ入れられまいとする足掻きから、口から出まかせを言ったのだ。彼女の容貌と仕ぐさは、どう見てもアングルシアのヒターナである。どちらかといえば地味で無骨なバスクの人間のそれとは、どうしても結びつかないのである。

ただ私は、ホセが、騙されているかと思いつつも結局はカルメンを逃がしてやった時の気持ちと同じように、私もまた彼女の言葉を信じたかったのだ。エチャラール村は、それほどに優しい風景の中にあつたのである。灼熱の太陽の下、セビージャの喧噪の中に徘徊しながらも、カルメンは確かにその風景を想いながらわたしはエチャラールで生まれたの、と言ったのだから。

エチャラール……。愛らしく、なんと魅惑的な響きの名だらう。

バスクとは何か

マドリードを発つ日の前夜、アンヘルの家へ電話をした。彼は三年前のことをよく覚えていた。しかし彼は、明日はバルセローナまで行く仕事があつて、代わりに自分の仲間を紹介すると言つた。

そして彼自身はその翌日、私たちが泊まるホテルまで迎えに行くからと約束して電話を切った。

マドリードからパンプローナまでの飛行機は、相変わず朝夕一便ずつしかなく、私たちは朝早くホテルを出た。バラハス空港は、セビージャのエキスポやバルセローナのオリンピック以来の増改築で、最近では国内線のターミナルの設備の方が良くなっていた。パンプローナまでは四十五分。午前九時過ぎ、殆ど定刻どおりに着いた。

空港にはアンヘルが言ったとおり、彼の仕事仲間のハビエルという男が出迎えてくれた。年はアンヘルと同じ五十前後か。長身で、スペイン人というよりは、ドイツ人のような風貌である。私たちはすぐに、エチャラルに向けて出発した。ピレネー山脈の向こう側である。同じナバラといっても、パンプローナではすでにバスク語を使わなくなっている。その言語圏が、次第に狭められていくのが現状である。しかしエチャラルでは、依然としてバスク語を使っている。

ピレネー山脈の向こう側にあつて、ドン・ホセが生まれたとされるエリソンドの町などがあるバスタン溪谷と、エチャラル村があるビダソア川流域は、ナバラの中にあつては外とはやや異なつた地域であるといえる。そしてそのナバラとかバスクというのは、スペインの国の中にあつて、いったいどういう存在にあるのだらうか。ドン・ホセという人間の性格を知るうえでも、それは是非確かめておかなければならないことなのだらう。

バスクとは、一つの民族を表す言葉である。つまり、マドリードを中心としたカステイリヤ人とは、異なる民族ということである。スペインにはその外にも、カタルーニャ語を話すカタルーニャ人、ガリシア語を話すガリシア人がある。スペインの東北部、カタルーニャ地方の中心地がバルセローナで、北西部のガリシア地方の中心に、巡礼地として知られるサンチャゴ・デ・コンポス

テラと、ラ・コルーニャという都市があるといえ、カスティーリヤ人とともに、スペインには大まかに言つて、四つの民族とそれらがもつ四つの言葉があると理解できるのではないだろうか。スペインを語る時に、それが一般的に言われている定義である。しかしこれは、少し不公平で不適切なものではないだろうか。なぜなら、スペインにはあと二つの民族、すなわちジブシーとモーロ人がいる筈である。

ジブシーのことを、スペイン語ではヒターノ、女性の場合にはヒターナという。この民族のことについては、のちにカルメンを語る際に少しページを割くことになるが、もう一つのモーロ人についても、スペインの歴史の中では絶対に忘れてはならない存在にあるのである。

一四九二年に、グラナダのアルハンブラの砦が開城された時以来、たしかにモーロ人はスペインの各地から放逐された。しかし彼らがもっていた文化と文明は、その後のスペインに、質の高い大きなものを残していったのである。そして彼らの血の一部は、肉体的にもカスティーリヤ人の中に入つていった。彼らはモーロ人としての言葉は失つたかもしれないが、民族としてはカスティーリヤ人と混血して生き残っているのである。モーロ人を低く見る理由はどこにもない。そんなわけで四つの民族とともに、ヒターノとモーロ人は、彼らと同列に並ぶ資格が十分にあるのである。

なおスペインでは、グラナダ開城以前にそこを支配していたイスラム教徒のことを、一般的にモーロと呼ぶが、それは元來、モーリタニア人を意味する言葉であるという。モーリタニアはモロッコの南にあり、彼らはアラブの一員としてイベリア半島を占領していたのである。しかし、イスラム教徒がすべてモーリタニア人であるということではもちろんない。

話をバスクに戻そう。今スペイン領内にあって、バスクとはいったいどういう存在にあるのか。